

エンゲルベルト・ケンプファーとヨーロッパの啓蒙主義 18世紀における『日本誌』の影響史をめぐって

著者	ペーター カピッツァ
雑誌名	東北ドイツ文学研究
巻	52
ページ	105-131
発行年	2009-07-31
URL	http://hdl.handle.net/10097/00127108

エンゲルベルト・ケンプファーと ヨーロッパの啓蒙主義

——18 世紀における『日本誌』の影響史をめぐる——

ペーター・カピッツア著

岡野 薫訳

緒言

書籍にめぐりあわせがあるように、本論のような論文にもまためぐりあわせがある。この論文は、ドーム版『日本誌』の愛書家向け復刻版の別冊解題として1980年に公刊された¹⁾。これは日本学の諸領域を包括する議論に関心を持つ日本学者の間に、ある安堵感をもたらした。この安堵感とは、ケンプファーの『日本誌』の複合的な受容史は18世紀ヨーロッパ精神界の主導的代表者たちを通じてもたらされたということ、つまり、ケンプファーはもはや知られざる預言者などではなく、ヨーロッパ啓蒙主義の日本学関連の決定的情報提供者であるというパラダイム転換の要であるということが、いつの間にか明々白々の常識となったこと²⁾、つまり、偉大なるケンプファーは故国にて認知されないどころか、全く無名の預言者であったという好事家たちの秘かな嘆きから解放された、という安堵感である。嬉しいことに、ケンプファー生誕350周年記念にこの研究が（今回は図版入りで）復刻に至るが、これはハイデルベルク的美術史研究者レッデローゼ Lothar Ledderose が書簡で既に1993年の時点において提案したものであった³⁾。上述した版が絶版となった後、復刻への決意は苦ではなかったが、それは、この復刻を以て記念の年に義務的な随想文を超えるような方法で、この偉大なドイツ人旅行家の記念にしたいという願いもあってのことである。

この論文に先駆けて、長きにわたる歳月が流れた。この歳月は他の文学関連におけるヨーロッパ啓蒙主義文献の集中的研究に費やされ、それは日本に関しては

原注

- 1) *Engelbert Kaempfers Geschichte und Beschreibung von Japan. Beiträge und Kommentar*, hrsg. von der Deutschen Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens(OAG)Tokyo, Berlin u.a. 1980, S. 41-63.
- 2) Man vergleiche z. B. den Katalog der verdienstvollen Ausstellung zum 300. Jahrestag der Ankunft Kaempfers in Japan, Tōkyō 1990, S. 131 sowie Japan und Europa 1543-1929. Essays(anlässlich der Ausstellung während der Berliner Festwochen 1993), S. 21 f.
- 3) 「この研究は画期的なもので、是非とも復刻が望まれます」。

原典資料集『ヨーロッパにおける日本』*Japan in Europa* に最終的に結実した⁴⁾。この資料集が出た 1990 年には、ケンプファーの日本到着 300 周年記念の展覧会やシンポジウムにおいて、このレムゴ出身者【ケンプファー】に思いが致され、また 1990 年に日本がフランクフルト書籍見本市の「主題国」となったことは、ケンプファーの思い出をまた新たにさせたのみならず、ケンプファーの数多の遺稿を批判版にて出版するというハーバーラント Detlef Haberland により提唱された計画もまた、旧ハンザ都市レムゴ並びにレムゴ・エンゲルベルト・ケンプファー協会 Engelbert-Kaempfer-Gesellschaft e. V. Lemgo の支援により実現を見たのである。今年、つまり 2001 年の秋にはエンゲルベルト・ケンプファーの著作の注釈付き「批判版」の最初の数巻が登場するまでに至った⁵⁾。このような版こそ、我々が長いことこのレムゴ出身者に返済せずにいた負債なのである。

Peter Kapitza

1890-1925 年までのヨーロッパ人による中国・日本受容に関する正真正銘の識者であるシュースター Ingrid Schuster の記述は、18 世紀ヨーロッパにおける日本イメージの研究を落胆させるような響きを有している。シュースターは「ヨーロッパは日本について長いことほとんど何も知らず、この東方の国に関して確たるイメージを形成することができなかった」と 1977 年に述べ、ヨーロッパでは「日本人がほとんど中国人と区別」されず、ようやく「1895 年と 1905 年の軍事的勝利が、中国とは異なった日本の独自性」をヨーロッパ人の意識に植えつけたと記した⁶⁾。この発言にサンソム George B. Sansom のごとき国際的な権威が自らの『世界史における日本』*Japan in World History* で記す「ヨーロッパの著述には日本に関して相対的に僅かな言及しかなく、それは、1639 年から 1853 年までの長きにわたる鎖国のためであることに議論の余地はない……」⁷⁾という見解を付け加えるなら、日本に関する一般的な無知は単に「19 世紀の初頭までは」支配的であったと、たとえサンソムが譲歩したにせよ、この一見論理的な理由付けに全くあき

4) 以下の小冊子でドイツに焦点を絞り最初の成果をまとめた。*Japan in der deutschen Literatur des 17. und 18. Jahrhunderts*, Nankodo Verlag, Tōkyō 1979. 2000 頁のコメント付き原典資料集 *Japan in Europa* はヨーロッパの日本受容をマルコ・ポーロからヴィルヘルム・フォン・フンボルトまでの原典によって跡付けている。

5) Detlef Haberland, Wolfgang Michel, Elisabeth Gössmann(Hg.): *Engelbert Kaempfer. Kritische Ausgabe in Einzelbänden*, München 2001(Iudicium Verlag). Band I/1 und I/2: *Heutiges Japan*, hrsg. von Wolfgang Michel und Barend J. Terwiel; Band II: *Briefe von und an Engelbert Kaempfer*, hrsg. von Detlef Haberland; Band III: *Die Pflanzenzeichnungen Engelbert Kaempfers*, hrsg. von Brigitte Hoppe. 更なる遺稿が 2003 年までにこのシリーズで出版される。

6) I. Schuster, *China und Japan in der deutschen Literatur 1890-1925*. Bern und München 1977, S. 56.

7) Tōkyō 1977, S. 8.

れてしまう⁸⁾。一連の発言の出典が共にマルティーノ Pierre Martino のしばしば引用される『18, 19 世紀のフランス文学における東方』*L'Orient dans la Littérature Française au XVII^e et au XVIII^e Siecle* (Paris 1906)にあることは明らかである。その中で彼は、憚ることなく「19 世紀以前、日本は数人のイエズス会士の報告によって知られているのみであった。日本に関して語られたあらゆる作品は、イエズス会士によって記されたものか、あるいは少なくとも、直接的に彼らによって伝えられたものであった。実際のところ、ヴォルテールの同時代人たちは日本を中国から決して正確に区別しなかった」(S. 108)と述べ、他の箇所では勢い余って「日本は 18 世紀において全く知られていなかった」(S. 270)とまで発言している⁹⁾。

彼らが言う通りだとしたら、エンゲルベルト・ケンプファーは 18 世紀において無駄に生き、無意味に書いたことになるのであろうか。ケンプファーが少なくともドイツにおいては知られざる預言者であったというのは、18 世紀末に既に現れる伝説であり、これはひょっとするとケンプファーの『日本誌』の翻訳の歴史やその出版の歴史にその元があるのかも知れない。というのは、周知のようにドイツ語の手稿の英訳は、既に 1727 年から利用が可能であり、この英訳をもとに、そして以下の件が決定的だったのだが、1729 年に仏訳が出され、この仏訳が版を重ね、その要約が——歪められた要約ではあるが——1749 年に出たデュ・アルド Du Halde の『中国帝国全誌』*Description de la Chine*¹⁾のドイツ語版にともかくも付録とされ、これが 18 世紀の「必読書」の一つにまでなったからである。ケンプファーの歪められたこのテキストがその故国に帰途を見出したということは、受容史の不条理に数えられるものと言えよう。なんととなれば、ケンプファーの『日本誌』のドイツ語版が出た 1777/1779 年にはるかに先立って、省略なしの『日本誌』が英語、オランダ語、そしてフランス語によって既にヨーロッパ全土で十分に受容されていたのであるから。いずれにせよ、翻訳と出版とのこのような複雑な歴史が『著名で、記憶すべき人物の歴史・文学的案内』*Historisch-literarisches Handbuch berühmter und denkwürdiger Personen*の執筆者をして早くも 18 世紀末に次のような発言をさせた。「という訳で、外国人がケンプファーの努力を破滅から救い、このドイツ人の面目を保たねばならなかったのだ……」。というのも、ドイツ人は「あまりに怠惰」であったし、いまだに「怠惰」だからである¹⁰⁾。こうしてホイース Theodor Heuss も、エンゲルベルト・ケンプファーは「国民の意識の中へと……入り込むことなく」、むしろ「専門的な学問のアラベスク」に留まったという苦言を 1947 年においても尚、呈することが可能であっ

8) Ebda. S. 9.

9) ケンプファー、シャルルヴォア、デュ・アルドを「作家、哲学者、劇作家、歴史家の誰もが参照したすばらしい学術的集成」とするマルティーノの記述は完全な齟齬をきたしている (S. 139)。

10) F. C. G. Hirsching, Bd. III/2, Leipzig 1797, S. 172 f.

た¹¹⁾。

そうだとするならば、せめても「専門的な学問」の代表者たちはケンプファーの影響を別様に評価することができ、また別様の評価を眼前にし得たであろうか。ベック Hanno Beck は 1964 年に、『日本誌』の復刻新版に同じような調子で序文を記した。(シュースター, サンソム, マルティエノの概略的見解に対して) ベックよれば、ケンプファーは確かにヨーロッパでは読まれてはいたが、しかし「ドイツでは全く無名のままであった」とされる。デュ・アルドの書に添付されたケンプファー『日本誌』からの抜粋 (1749 年), すなわち「精彩を欠いたロストク版」は、ベックよれば「全く影響がなかった」ため「1773 年になってようやく、故国における真のケンプファー受容史」が始まったと言う¹²⁾。1773 年とは、ビュッシング Büsching がケンプファーの『日本誌』のドイツ語による手書き原稿をレムゴから送付され、【これを底本とした】ドイツ語版の予約購読者を募った年である¹³⁾。こうした表現がいかに容易に誤解され得るかという例は、ビッテリ Urs Bitterli の一読に値する著書『「未開人」と「文明人」』*Die ‚Wilden‘ und die ‚Zivilisierten‘* が示している。同書は日本に関して遺憾ながらベックの記述に依拠し、この記述を「ドイツにおいて……ケンプファーは 18 世紀の終わりまで知られていなかった」¹⁴⁾という表現にまで雑にしてしまった。ケンプファーは「国民の意識」の中へ取りこまれたことも、「ドイツで周く知られる」ことも恐らく全くなく、常に数少ない好事家によってのみ読まれ、評価されるに過ぎなかったということはさておくとしても、ケンプファーの著作の出版史を(もちろん、これは当時のドイツの惨憺たる状況を反映しているのだが)ドイツ自体におけるケンプファー受容の基準とするならば、それは 18 世紀の文献にほとんど熟知していないことを示すものであろう。

教養人たちは(そもそも、教養人以外の誰がケンプファーを読んだであろうか)ケンプファーをフランス語で読んでいた。それゆえ、ゴットシェート夫人の蔵書の競売カタログにケンプファーの 1732 年の仏語版 3 巻本が載っているのを発見しても驚くに値しないのである¹⁵⁾。18 世紀の文献や文学的な営みに関する今日の無知は、少なくとも当代と同じように過小評価されるべきではないだろう。

11) Engelbert Kämpfer, *Der erste deutsche Forschungsreisende*. In: *Schattenbeschwörung. Randfiguren der Geschichte*, Stuttgart und Tübingen 1947, S. 23.

12) Engelbert Kaempfer, *Geschichte und Beschreibung von Japan...* Unveränderter Neudruck ... Mit einer Einführung von Hanno Beck, Stuttgart 1964, Bd. I, S. 1 f.

13) Vgl. dazu H. Hüls, *Zur Geschichte des Drucks von Kaempfers Geschichte und Beschreibung von Japan und zur sozialökonomischen Struktur von Kaempfers Lesepublikum im 18. Jahrhundert*. In: Engelbert Kaempfers *Geschichte und Beschreibung von Japan*. Beiträge und Kommentar, hrsg. von der Deutschen Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens(OAG), Tokyo, Berlin u.a. 1980, S. 65-94.

14) U. Bitterli, *Die ‚Wilden‘ und die ‚Zivilisierten‘. Grundzüge einer Geistes- und Kulturgeschichte der europäisch-überseeischen Begegnung*. München 1976, S. 70.

15) *Catalogue de la Bibliothèque Choisie de Feue Madame Gottsched, née Kulmus*. Leipzig 1767, S. 18.

I

『日本誌』の数奇な出版史の中でしばしば忘れられるのは、ケンプファーは存命中の1712年に既に『廻国奇観』*Amoenitates Exoticae*を公刊していたことであり、そこには日本をテーマとする論文も含まれていた（18世紀にしばしば論じられた日本の鎖国政策の正当性をめぐる有名な「鎖国論」も）。1713年7月の『トレヴー誌』*Mémoires de Trévoux*は『廻国奇観』を広告し、そこでケンプファーの序文に言及する。この序文の中で、ケンプファーは自分の原稿【『日本誌』】を「ドイツ語によって……出版される今日の日本」として告知し、出版の援助を求めている。フランスの『トレヴー誌』も同じくケンプファーの著作を印刷された状態で見たいと望んでいるが、しかし「著者が全てのヨーロッパの国民に彼の著作をラテン語で提供するのであればよいのだが」とも付言する¹⁶⁾。これがはっきりと意味するのは、ケンプファーの著作が学問的に啓発的で有益であると期待されていたということ、そして幸運にも（ブル神父 *Père Bouhour* のドイツに対するフランスの優越意識を弁護する訳ではないが）『廻国奇観』が、さしあたってはドイツ語以外の言語で登場したことである。なぜなら、もし『廻国奇観』がドイツ語で出版されたならば、同書が18世紀において実際に持ったような全ヨーロッパ的な影響力を持てなかったであろうから。1714年4月、パリ発行の『ジュルナル・ド・サヴァン』*Journal de Sçavans*は『トレヴー誌』の広告を『日本誌』の告知と共に引き継ぎ、さらにそこから、1715年の『ライプツィヒ学術新報』*Leipziger Neue Zeitungen von gelehrten Sachen*がその二つの告知を借用し「この国の現況について、我々はケンプファー博士の報告に期待するところがある」（S. XLVI）と楽観的に書いている。1716年のケンプファーの死は、これら全ての日本に関する計画を一旦は頓挫させた。その間には、ライプツィヒの『1718年の新刊』*Nova Litteraria Anni MDCCXVIII*のみが「最高の努力を以って」日本研究を行った者としてケンプファーの終生の仕事に言及しただけである（S. 65 f.）。1727年以降の矢継ぎ早な『日本誌』の刊行はヨーロッパで評判となったが¹⁷⁾、それらは、ほとんどの場合、ケンプファーを信頼に値すると判定し、彼を原典として引用することを見ても明らかな通り、冷静で学問的なケンプファー受容であった。

高名なギーセンの医師ヴァレンティニ *Michael Bernhard Valentini* は『あらゆる材料と香辛料の舞台、並びにその自然の描写、選択、効能と用法』*SchauBühne Aller Materialien und Specereyen Nebst deren Natürlichen Beschreibung/Election, Nutzen*

16) D'Alemagne de Lemgou (S. 1286) という見出し語で。

17) Vgl. K. Meier-Lemgo, *Bibliographie der Werke Engelbert Kaempfers*. In: *Engelbert Kaempfer, Philipp Franz von Siebold*. Gedenkschrift (Mitteilungen der Deutschen Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens, Supplementband XXVIII), Tokyo 1966, S. 53f. — Vgl. weiterhin den *Extrait de l'Histoire du Japon par le Docteur Kaempfer*. In: *Lettres serieuses et badines sur les ouvrages des savans*, Tome Second. Premier Partie, A la Haye 1729, S. 345-378.

und Gebrauch の第2版¹⁸⁾で、ケンプファーの『廻国奇観』を繰り返し引用している。ちなみに、ヴァレンティニの著作は、シーボルト Philipp Franz von Siebold によっても使用されたものでもある¹⁸⁾。さらには、サンクトペテルブルグの科学アカデミーに勤務し、そこで（難破した）日本人とも共同作業を行った著名な（ゴットシェートにその雄弁を評価された）¹⁹⁾中国学者バイヤー Gottlieb Siegfried Bayer は、1730年にその『中国博物館』Museum Sinicum 中で、ヨーロッパにおける中国知識に関する伝記的、文献目録的な序文を記し、そこでバイヤーは「極めて勤勉な男」であるエンゲルベルト・ケンプファーとその著書『廻国奇観』にとくに言及し、ケンプファーは日本の植物の名を中国の文字で記そうと努めたが、それらを日本語発音で表記したと述べている²⁰⁾。

デュ・アルドと同じイエズス会修道会士シャルルヴォア Charlevoix が、1715年の『日本キリスト教史』*Histoire ... du Christianisme dans l'Empire du Japon* を、ケンプファーの『日本誌』との競合的な試みとして1736年に拡充したのは恐らく偶然ではない。この書に彼は『日本全史誌』*Histoire et Description Générale du Japon* という野心的な題名を与えた。シャルルヴォアの重要性は18世紀のケンプファー受容史において看過されるべきではない。何しろ彼はケンプファーの最初の批判者だったのだから。彼はあらゆる件に関してケンプファーを極めて重要視、というより、日本の「自然史」に関する限り全ての点でケンプファーを絶対的な権威と見なしたほどだったのだ。かくてシャルルヴォアは「日本の植物の記述」(Bd. 6, S. 177-313)と同時に、長崎の記述(Bd. 5, S. 418 ff.)においても、明確にケンプファーに準拠したのである。それでも、シャルルヴォアによる自らの情報源に対する批判は『日本史』*History of Japan* という名で登場したケンプファーの著作の題名が自負するところに向けられた。シャルルヴォアは自らの著作のみにこの題名を是認する一方で、ケンプファーの著作を「日本についての最近の報告書」とか「彼の日誌」と呼んで格下げし(Bd. 1, S. 15)、この著作を「好奇心の強い旅行者の報告で、実に有能な人間であり、民間伝承にすこしばかり重きを置きすぎるが、これは歴史ではない」(Bd. 6, S. 364)とした。この「旅行者」という名称は、軽蔑的な調子を示すために、批判的な箇所でも極めてしばしば繰り返

18) Vgl. dazu H. Körner, *Die Würzburger Siebold. Eine Gelehrtenfamilie des 18. und 19. Jahrhunderts*, Neustadt a.d. Aisch 1967, S. 814. ヴァレンティニは、自著 *Ost-Indiansche Send-Schreiben* の補遺の中で公にした。

19) ゴットシェートは、バイヤーが1727年にペテルスブルグのアカデミーで朗読したエカテリーナ1世に対するバイヤーの弔辞を *Handbuch der Redekunst* に収録した。

20) S. 73 f. 【原文は以下の通り。】 Non est hoc loco dissimulandum Engelpertum Kaempherum diligentissimum virum, cum in Iapania ageret in eam etiam partem studium suum vertisse, vt Iapanicas litteras cognosceret. Iisdem autem vtuntur litteris Iapanes, quibus Sini, suo tamen sermone pronunciant. Itaque Kaempherus cum amoenitates suas Europae exhiberet, nitidissimas sane herbarum aliarumque naturae vocum literas excudit, sed Iapanice enunciatas.

される。彼が自分の同胞たちの宣教方針をケンプファーによる批判（それは全く穏当で熟慮を経た批判なのだが）から擁護する箇所では、ケンプファーに対するシャルルヴォアの軽蔑的な装飾形容詞は増大する²¹⁾。その手法には配慮が行き届いている。シャルルヴォアは自著の終わりに付した一部論評付きの大規模な日本関係参考文献一覧において『廻国奇観』に大きな賞賛を与えるが²²⁾、ポルトガル人やスペイン人を国外追放に至らせた諸事件およびその直接的責任が問題になると、今度は逆に、この「プロテスタントの物書き」Ecrivain Protestantや「プロテスタントの単なる証言に過ぎない」(Bd. 4, S. 279)として非難を隠そうとしないのである。すなわち、ケンプファーの自然史的（教会にとって無害な）研究ははっきりと評価され、宗教上の問題で信頼に値しない「プロテスタントの医師」(Bd. 1, S. 177)については、神学的・教会史的解釈に関する「誤り」(Bd. 2, S. 279)を責めるのである。もっとも、ケンプファーが自らの雇い主であるオランダ東インド会社の憚るところのない金儲け主義を非難したことで、この「プロテスタントの著者」Auteur Protestant (Bd. 5, S. 320)はその「公正な気質」並びに「ドイツ人の真摯さ」(Bd. 5, S. 328)ゆえに、高い賞賛を受ける（後で見ると、こうした賞賛はシャルルヴォアによるものだけではない）。ともかくも確認すべきは、このイエズス会士の著者ですら、ケンプファーが「彼らの宗教の様々なシステムを」(Bd. 6, S. 363)他の誰よりもよく整理したと証言していることである²³⁾。

ドイツにおけるケンプファー受容史にとって早い時期の極めて重要な証言は、ブルッカー Jakob Brucker の記念碑的かつ地理学・年代学的に一歩進んだ『哲学の批判的歴史』*Historia Critica Philosophiae*である。同書の1744年の第4巻は、その「日本人の哲学について」の章において、主にケンプファーに依拠しており、そこで、ブルッカーは彼を「極めて学識ある医師」として特筆し、その「的確な見解」を賞賛し、ケンプファーを「日本語の発音の最上の専門家」とであると考

- 21) ケンプファーの歴史家としての学問的能力は否定される。シャルルヴォアにとってケンプファーは部分的に「あやふやな情報」(Bd. 4, S. 246 f.)であるとされ、部分的に「彼の研究と正直さゆえに尊敬すべき」(Bd. 1, S. XV)ではあるが、ケンプファーは自分の典拠を「少しばかり軽率に考えた」とされる。この引用および前の引用は私が使用することができた1754年の第2版に全て拠っている。
- 22) 「この著者が細心の注意を払って収集した日本の自然史に関して、私はほとんど全てこの著書から引用した」(Bd. 6, S. 349)。
- 23) 日本に関するあらゆる入手可能な文献を利用するという途方もない努力並びに細部批判の洞察力が奏功し、18世紀においてしばしばケンプファーと同等と見なされるのはシャルルヴォアであり、それどころかシャルルヴォアは、その大規模な体系に基づいて証人としてのケンプファーを背景に退かせる。とはいえ、同時代の人々が早くも見抜いたように（ドーム版『日本誌』におけるドームの所見を参照 Bd. 1, S. 186）、大部分においてやはりシャルルヴォアはケンプファーの素材を再現したのみであった。シャルルヴォアの著作の特定の箇所は同時代人によって好んで引用されたが、それは例えば日本人の容貌に関する記述であり、そこでは日本人の容貌は（女性を例外として）極めて不利な考察が為されていた。（そこからの影響はヘルダーの『人類史の哲学考』にもまた見られる）。控え目な目撃者の証言に従うよりも、証拠が寄せ集められ、引用し易いがゆえに編纂者の方に人は従うものである。

えたゆえに、日本人の名前の書き方までも引き継いでいる。日本に関する「極めて豊富な知識」はケンプファーによるものであるとして、ブルッカーは1732年のフランス語版に従ってケンプファーを引用するが、それでも彼は「自筆のドイツ語が出版されることが、さらに求められる」(S. 907)と宣言する。1747年に出版された哲学史の補遺において、ブルッカーは同国人ケンプファーをシャルルヴォアの攻撃から擁護している。シャルルヴォア自身もケンプファーの綿密さや入念さを否定せず、とりわけ、至るところでケンプファーに準拠し、ケンプファーほど日本の哲学や宗教の記録を叙述した者は他に誰もいなかったと認めざるを得ないと述べたではないか、と (S. 1000)。

ケンプファーの影響がフランスの百科全書派にまで波及したことは、1755年^{三)}の『百科全書』*Encyclopédie*の項目「日本人の哲学」*Philosophie des Japonois*が示す。この項目はポッセヴィーノ Possevino、ベール Bayleと並んでブルッカー、ケンプファーまでも出典として挙げた。「かの有名なケンプファーは、博物学者、地理学者、政治学者、神学者として日本を巡歴し、彼の旅行記は我々の良書のうちでも卓越した地位を占める」(S. 455)²⁴⁾。

ケンプファーの名声はこの後、公道を、よりの確には街道を伝わって行ったが、そのようなものとして、18世紀の旅行記全集の類は十分に評価されねばならない。こうした全集は原典の適切な編纂を通じて「知的好奇心に満ちた」読者に、原典自体を読む手間を省いたのである。広い読者層を対象とした旅行記や何巻にも及ぶ旅行記全集、そして、啓蒙主義時代の普遍史 *Universalgeschichte* や歴史哲学的著作、これらがケンプファーの名を全ヨーロッパに運んだ。旅行記文学が満ち溢れる中で、ケンプファーの名が権威として定着していることが、いかに早期にドイツでも知られるようになったかは、オランダ人ファン・ゴッホ van Goch の著作の1733年の独訳本によってもわかる。この著作は、英国の船長サモン Thomas Salmon による日本記述をゴッホが増補再訂した著作であった。ファン・ゴッホは、ケンプファーをはっきりと引き合いに出し、次のように述べる。「彼の『日本誌』は我々全てが最高のものとして賞賛する。同書の物珍しさは日本について更なる研究を促す」。当著作を独訳した匿名の翻訳者は、その序文で日本記述に関する新たな学問的状况を示唆し、その中で、カロン Caron のような17世紀初期の著述家を「古い著者」と呼び、「彼らは我々に日本が100年前とそれ以後にいかなる状況であったかを描写してみせる」と述べる一方で、テン・ライネ Ten Rhyne やケンプファーのような著述は「日本に関する全ての事柄について、

24) ここで看過されるべきでないのは伝記的な【記述を含む】大事典である。Niceron (1732, deutsch 1757) に始まり Zedler (1737) を経て Jöcher (1750) そして Feller (1769) から Hirsching (1797) に至るそれらは、ケンプファーの生涯や評価を該当する項目で紹介している (大部分はショイヒツァーの1727年の英語版のための伝記に基づいており、この伝記は『日本誌』のその時々への翻訳に収録された)。ただし、こうした項目はある著述家の影響史において高い地位を占めてはならない。というのも、それらは往々にして、その影響史の遅まきの反応に過ぎないからである。

最も信頼できる」²⁵⁾としている。例えば、ヘルダー Herder でさえも、日本人について叙述する際にその『人類史の哲学考』 *Ideen zu einer Geschichte der Philosophie der Menschheit*²⁶⁾の中で、日本について大幅に『水陸旅行記、すなわち、旅行記全集』 *Allgemeine Historie der Reisen zu Wasser und zu Lande oder Sammlung aller Reisebeschreibungen* に依拠した。この『水陸旅行記全集』の1753年の11巻には「エンゲルベルト・ケンプファーの日本への旅」(S. 501-560)が見出されるが、そこに収録されているのはケンプファーの実際の旅(シャムから日本へ、長崎から江戸へ、そして長崎の町の描写)のみであった。次の「日本列島の叙述」(S. 561-712)という章も大幅にケンプファーに依拠してはいるが、シャルルヴォア、カロン、ピント、リンスホーテン Linschoten、フランシスコ・ザビエル Franz Xaver 等々の情報も盛り込んでいた。ヘルダーは日本人の外見の描写にあたって、その脚注が示すように、よりによってシャルルヴォアにとらわれてしまったが、同伴に関するシャルルヴォアの寄せ集めの記録は『水陸旅行記全集』に収録されていたものだった(S. 595)。この『水陸旅行記全集』で、少なくとも日本女性の美しさの名誉回復のためにケンプファーが引用されていたことを、このとき非常に偏向した態度で接したヘルダーは、無視してしまった。ヘルダーはモンテスキューによるアジア的専制政治という見解にとらわれていたのであって、日本人について「……彼らの政体と知恵は暴力的な抑圧で充滿している」²⁷⁾と記す。ヘルダーは、レムゴにおけるケンプファーの蔵書の競売の際に(彼はこの目的のためにビュッケブルクからわざわざレムゴにやってきた²⁸⁾)多くの書籍を入手しているのであり、そのヘルダーから、ケンプファーへの示唆があっても良かったはずなのであるが。

既にブルッカーが弁護したように『水陸旅行記全集』もケンプファーをイエズス会士シャルルヴォアの攻撃に対して擁護し、「日本人は知性において全く欠けることのない人々だと考えるとケンプファーは一度ならず度々証言している。しかし、日本に関する最近の歴史家(シャルルヴォア)は、この記述を極めて不完全であると広言する。彼の考えでは、ケンプファーは日本人を正しく熟知していなかったという。なんととなれば、シャルルヴォアは、ケンプファーが日本人との真に親密な交際を結ぶことができなかったと考えたためである」(S. 607)。この点について『旅行記全集』の脚注は次のように記した。「ケンプファーは、この

25) *Der Heutigen Historie oder des Gegenwärtigen Staats aller Nationen, Ersten Theils, anderes Stück, enthaltend eine umständliche Beschreibung des Grossen Kaiserthums Japan, an statt der kurz gefaßten Englischen Nachricht des Herrn Capitain Salmon. Von dem Herrn M. van Goch, M. D. in Holländischer Sprache entworfen, und anitzo ins Teutsche übersetzt von A. H., Altona 1733; beide Vorreden sind unpaginiert.*

26) Theil 2. 1785 (Sämtliche Werke, Hrsg. B. Suphan, Bd. 13, S. 218.)

27) Ebda.

28) Vgl. dazu F. Flaskamp, *Herders Bücherkauf zu Lemgo. Ein Beitrag zur Geschichte der Bibliotheca Herderiana. In: Jahrbuch der Gesellschaft für niedersächsische Kirchengeschichte* 65 (1967) S. 218-235.

国の極めて正確な状況、同国の税収、国の地勢、地図等々、日本が外国人に伝えることを厳罰で禁じているものを手に入れる術を心得ていた。こうした情報は生粋の日本人によって伝えられたものであった。このようなことが親密な交際なしで可能であったらうか。それとも、彼が日本で宝物を収集する意思がなかったというだけで、このようなことができたとでもいうのか。というのも、このようなことのためには、国の報告だけを入手しようという場合以上の親密な交際が必須だからである。はるかに驚くべきは、日本国民を熟知していたはずのイエズス会士たちが、日本に長く留まることができない程に宣教を拙劣に行ったことである。しかしまた、日本人と親密な交際を結ぶことができなかったため、イエズス会士たちは日本人の気質の観察をようやく後追いで行った可能性もあり得る」(S. 606 f.)²⁹⁾。

非ヨーロッパ諸民族に関する単なる「描写」のみならず、それら諸民族の人類史における位置についての関心が増大し、そのことにより、ケンプファーの日本報告は普遍史の中へと入って行くまでになった。この普遍史は、進歩史的な叙述というよりは、むしろまだ地理学・年代学的手法をとっていたとは言えようが。

レッシングは1754年12月28日付の『ベルリン市公認新報』*Berlinische privilegierte Zeitung*で、ド・マルシィ de Marsy の『ロリンズ中古代史の続編としての中国人、日本人、インド人等々の近世史』*Histoire Moderne des Chinois, des Japonnois, des Indiens ... etc, pour Servir de Suite à l'Histoire Ancienne de Rollin*の1・2巻を書評した。同書はこの書評と同じ年にパリで出版され、1756年にツァッハリエ J. F. W. Zachariae によって独訳された。同書の第2巻は数百頁あり、全て日本に充てられていて、その主たる典拠はまたしてもケンプファーである。ここでケンプファーは批判的に利用され、それは「ケンプファーの判断によれば」、「ケンプファーはこのような考えである」といった言い回しからも窺える。ケンプファーは、ある時には唯一の出典として「ケンプファー、この人から私はこの状況の全てを借用する」(S. 378)と名指しされ、またある時は「ケンプファーはこの奇妙な習慣について何も語らない」(S. 341)というように、日本に関するあまりに信じ難い噂話の矯正者として利用される。フランス人のド・マルシィが、同国人シャルルヴォアをも引用するのは当然だが、それでも、宣教師たちの振舞いに対するケンプファーの批判は真摯に受け取られる。「私は、自分がケンプファーの中で読んだのと同じようにその出来事³⁰⁾を語った。ケンプファーは公平な著述家であり、彼がポルトガル人を誹謗したとか、雇い主であるオランダ人に媚びへつらっ

29) 1769年に *Sammlung der besten und neuesten Reisebeschreibungen* は、その第7巻 (S. 153-251) において「エンゲルブレヒト^{ママ}・ケンプファーによる日本王国の記述」を提供し、ケンプファーを「日本に関して」「唯一にして最高の証人」と呼んでいる (S. 154)。

30) Vgl. hier und im folgenden Engelbert Kaempfer, *Geschichte und Beschreibung von Japan*, 2 Bände, Lemgo 1777-1779, Bd. 2, S. 62 (Faksimile-Ausgabe, Tōkyō u.a. 1980).

たなどと、彼について不当な憶測をすることはできない」(S. 299)。ド・マルシイは 400 頁強のその日本叙述を、鎖国の問題で締めくくった。彼は、こうした方法で日本の歴史を「心地よい仕方」で終わらせることを告知し、そして、このための粉本となるケンプファーからの抜粋は「楽しみながら」読まれるであろうと請合っている。ドームはドイツ語版における自らのあとがきの中で、ケンプファーが学術的・修辞学的試論【「鎖国論」】で表明した主張に取り組むが、こうした取り組みはドームが初めてではなく、この時点で既に、つまり、1756 年に既に、ケンプファーのあまりに高揚した楽天的見解への批判がみられるのである。その批判は次のような点をめぐって為された。すなわち、厳格な統治の下では従順さが主要な政治的徳目なのだが、こうした統治が実際に「全帝国を賢明さと良俗の学校」にしたのかどうかという点である。「この叙述は非常に立派に響くのだが、しかしケンプファーはどうやら忘れてしまったようである。彼自身が我々に、賢明さと良俗のこの学校において最もおぞましい悪徳の栄えを我々に見せてくれたことを。自殺、ぺてん、高慢、そして、人倫にもとる快楽が蔓延し得る国が、こうした名称を戴くことはできないと思われる」(S. 414)。ケンプファーを弁護するために、ここでは、次のような体裁上の理由を挙げることはできない。「鎖国論」は 1712 年に、言うことはケンプファーの『日本誌』の 15 年前に、出版されたものであり、後世の編者たちは「鎖国論」を『日本誌』の付録として収録し、ド・マルシイもこの論文を『日本誌』の付録として見たのである。だが、この「鎖国論」は『廻国奇観』の自然科学的な文脈での印象と、『日本誌』の付録とでは、異なった印象を与えるのである。

1762/63 年に、英語から翻訳された『世界史』*Algemeine Welthistorie* の 24・25 巻が出版され、このドイツ語版は高名な神学者ゼームラー Johann Salomon Semler の監修によるものであった。第 24 巻のシャムについての章で、フランス使節と宣教師の情報とケンプファーの情報との比較が提示される。ケンプファーは 1690 年に、つまり、シャムの国王に対する叛乱のまさに直後にこの王国を訪れていたのである。第 25 巻の序文で、ゼームラーは、ショイヒツァーがケンプファーの英語版『日本誌』の序論に極めて優れた文献目録を掲載したにも拘わらず、『世界史』のイギリス人著者たちが、日本史について広範な資料を使用しなかったことに苦言を呈した。249-388 頁は日本を取り扱っており、そこでは絶えずケンプファーが引用される。もっとも同時に他の著者も引用されている。既にスイフト Swift によって烙印を押された^四 オランダ人の金銭的な強欲（当然、日本貿易をめぐるオランダとの市場競争における英国の劣勢を背景としている）は、ケンプファーの同伴についての主張を引用しつつ、日本の歴史の結びにおいて英国的な視点から改めて批判される。

ゲッティンゲンの歴史家ガッテラー Johann Christoph Gatterer は『普遍史案内』*Handbuch der Universalhistorie* (1764) において、「原典」と「参考資料」を区別

するという興味深くも不器用な試みを企てた。「日本人の歴史」(Bd. 1, S. 413-522)では次のような具合になっている。すなわち、彼は原典を「日本の歴史家たち」と見なし、「彼らは、後に列挙する後代のヨーロッパの諸歴史書、とりわけケンプファーの著作中で使用された」とし、さらには「中国の諸歴史書」をも原典と見なす。またガッテラーはある「日本の年代記」も示唆する。それはドギース Deguignes が自らの著書『フン族、トルコ人、ムガル人およびその他の西方のタタール人の歴史』*Allgemeine Geschichte der Hunnen und Türken, der Mogols und anderer occidentalischen Tartaren* (仏語版 1756, 独語版 1768-71) で使用したもので、バリーに在るとのことだが、ガッテラーは、この年代記に一瞥も与えないのである。「参考資料」については、年代順に、イエズス会年報、日本の教会史の著者たちおよびオランダの諸々の旅行記が挙げられ、ケンプファーは 1729 年のフランス語版から引用されている。ガッテラーは、例えばヴァレニウス Bernhald Varenius やシャルルヴォアのような編纂本の類並びに普遍史ないし旅行記叢書の類にも忘れることなく言及している。

ボイゼン Friedrich Eberhard Boysen は、1767-1772 年に改めて『世界史』*Allgemeine Welthistorie* の抄訳を行うよう取り計らったが、その 9 巻には「日本人の歴史」(S. 610-730) がある。序文において、日本は「一度も征服されたことのないアジアにおける唯一の帝国で、ひょっとすると決して征服することのできない帝国かもしれない」といった権力政治的な評価が与えられる。この帝国の描写のために「とくにケンプファーの有名な著作」を参照したとされるが、ここでも 1729 年のフランス語版が使用された。ところで、日本史を記述する長さとしては、8 つ折版 120 頁から 150 頁程度が適当な長さだと考えられたようで、例えば、ドルヴィル Contant Dorville によるフランス語の『世界諸民族史』*Histoire des Différens Peuples du Monde* (Paris 1772) も「誠実な旅行者」たるケンプファーから長い引用を行っている。彼もまた將軍の謁見の場面(「この突拍子もない場面」S. 332 ff.)を詳細に記すが、これについては後述に譲る。

ケンプファーの影響と評価に関する重要な権威として、ハラー Albrecht von Haller の 1771 年と 1772 年の『植物学全集』*Bibliotheca Botanica* における証言がこれまでのところ指摘されてきた³¹⁾。しかし、ハラーは、20 年も前にドイツ語訳された英語の旅行記の序文において、ケンプファーを称揚し、ケンプファーとヨーロッパの植物学者の質を比較して、次のように語っていた。「一人のケンプファー、一人のトゥルヌフォール、一人のラウヴォルフ^{五)}」に対して、100 人の退屈な船乗り、あるいは、100 人の勇敢な冒険者が見つけられるけれども、この連中は自分たちが赴いた国々の言語も、法律も、自然も何も知らないのである」³²⁾。

31) So K. Meier-Lemgo, *Die Wirkung und Geltung Engelbert Kaempfers bei der Nachwelt. In: Lippische Mitteilungen aus Geschichte und Landeskunde* 34 (1965) S. 199.

32) *Reise nach Hudsons Meerbusen ... beschrieben von Heinrich Ellis, Göttingen 1750* (Vorrede, unpaginiert). また、以下の著作に翻刻された。*Sammlung Kleiner Hallerischer*

しかし、ケンプファーは民俗誌的、世界史的、宗教史的、並びに植物学的な³³⁾学識の分野で参考文献として挙げられただけではない。ケンプファーは、地理学的な問題には専門知識をほとんど持ち合わせていないことを露呈しているにも拘わらず、その分野においても参照された。周知のように、何世紀もの間、日本の北方の地理学的な状況は不確実なままであった。当時の地図を一瞥すると、北海道すなわち当時の呼び名では蝦夷が、いかに不確かであるかが明瞭である。この地は全く描かれぬか、地図の上端に押しやられて、その下半分だけが見えるのみで、つまり、この地が島であるのか、アジア大陸の一部なのかは未解決のままに残されたのである。同じように未知であったのは、北海道の北にある島々の位置であり、そのため、この島々がアジア大陸とアメリカ大陸のいずれに分類されるのか、やむを得ず未解決のままにされていたのである。ケンプファー自身は北海道を島として説明するものの、もう一つ別の固有な島として松前を仮定しており、また「奥蝦夷」については報告することができなかった³⁴⁾。日本の北方諸島の位置は、北西航路ないし北東航路の探索の関連で長いことヨーロッパ人の航海者たちの心をとらえてきた。そして、この問題は言語学者の関心をもひきつけることになる。辞書の著者として名高いアーデルング Johann Christoph Adelung は、1768 年に「日本および中国への北東航路発見のために様々な国民によって企てられた」『航海と探索の歴史』*Geschichte der Schiffahrten und Versuche* を執筆した。その第 5 巻において彼は「日本の北方における探索と発見」について叙述した。その際、体系的な編纂者たるアーデルングにとって、体系的な編纂者であるシャルルヴォアは主要な典拠として望ましいものであった。必然的に、ケンプファーは、アーデルングの北東アジアの地理に関する年代順の記述では、引き合いに出される多くの証人の一人に過ぎなくなる。第 2 章の第 17 節で「ケンプファー、この著名なドイツ人は、日本の歴史に非常に大きな明かりを点した」として、ようやく彼の名前が登場する (S. 460)。とにかく、アーデルングの多大な努力は、次のような、どちらかといえば哀れな告白によって終わっている。「日本で蝦夷という名前は、この国の北方にある土地ないし島を指すものであるということが、以上のことから、かなりはっきりとしたのではないと思われる」(S. 504)。

以上のような厳密な学問分野での諸業績と並んで、ケンプファーもまた 18 世

Schriften. Bern 1756.

33) K. Meier-Lemgo (vgl. Anm. 31) は次のように指摘している。スウェーデンの日本旅行者トゥンベリは、日本から帰国後、リンネの後継者として、リンネが発展させた体系をもとにケンプファーの植物学的報告を 1780 年と 1784 年に *Kaempferus illustratus* として整理した。日本研究家としてのケンプファー名声を（無理からぬことではないが）高らしめようと努力したフィリップ・フランツ・フォン・シーボルトにとって、長崎に到着するや否や、出島の高名な二人の先達、すなわちケンプファーとトゥンベリの記念碑を、自らの名前で建てることが急務であった。同伴については、H. Körner がその綿密且つ一読に値するシーボルトの伝記で言及している。

34) Vgl. Bd. I, Tafel VIII, sowie S. 78 f.

紀において既に、異国の珍しい事柄、例えば最初に「石敲あるいは鵲鴿を真似た動きによって、妻の伊邪那美尊と肉交の道を知った」(Bd. 1, S. 254) という「アダム以前のアダム」(Bd. 1, S. 113) である伊邪那岐尊に関する記述などによって、異国の珍奇な事柄の提供者となった。この記述は、異国の神話を理解する力をまだほとんど持っていなかった 18 世紀の歴史家や大衆の哲学者の嘲りを買ったのみならず、18 世紀後期の完全にロココ的な官能性を伴って「文学」の裡に入り込んでいった。

1758 年の『国民的自尊心について』*Von dem Nationalstolze* の論考で、ツィンマーマン Johann Georg Zimmermann は、ある章を「民族の空想上の古代に基づく自尊心について」と題し、その中で彼は日本に関する全ての情報をケンプファーの著作からとり、さらに伊邪那岐尊に関する際どいディテールを見逃さなかった。伊邪那岐尊は「石敲という鳥から、ちょうど後代の我々小人物がそれ以降しているように、妻との交わりを学んだ」³⁵⁾。1758 年³⁶⁾の『ゲッティンゲン学術報告』*Göttinger Gelehrte Anzeigen* において、アルブレヒト・フォン・ハラーはツィンマーマンを茶化して「我々は神である伊邪那岐尊の行為とのある種の比較を読まぬ方が良かった」と強調した。しかし、1772 年の国家小説『黄金の鏡』*Der Goldene Spiegel* におけるヴィーラント Wieland も、1778 年の好奇心一杯の『日本皇帝との謁見の報告』*Nachricht von meiner Audienz beim Kaiser von Japan* におけるクラウディウス Matthias Claudius も、神と鵲鴿の挿話を見逃さなかった。このような性的で異国的なディテールに限定されたケンプファーの『日本誌』の受容を、どちらかといえば冷めたケンプファーは夢想だにしなかったであろう。

II

シャルルヴォアの著作は、その公刊以後、しばしばケンプファーと並び称されて利用されはしたが、まさにそのフランス啓蒙主義は、ケンプファーの著作が不偏中立性のゆえに高い評価を受け続け、文学作品に織り込まれるように尽力したのである。そして、この文学作品は啓蒙精神に特有の目的に役立ち得るものであった。

ダルジャン侯爵 Marquis d'Argens は 1739 年に出版された『中国人の手紙』*Lettres Chinoises* の中で、差出人の「中国人」の一人に 13 通の書簡で日本から「報告」させ、その際、彼は唯一ケンプファーのみに依拠している。こうした架空の旅行文学というジャンルが人気を博す中で（好例としてモンテスキューの『ペルシャ人の手紙』*Lettres Persanes* がある）³⁷⁾、この種の文学作品を通じたケンプファーの

35) Zit. nach der zweiten Auflage Wien 1766, S. 24.

36) S. 588 ff. 以下のものに再録された。Tagebuch seiner Beobachtungen über Schriftsteller und über sich selbst, Erster Theil, Bern 1787, S. 161.

37) Vgl. M.-L. Dufrenoy, *L'Orient romanesque en France 1704-1789*, Montreal 1946, S. 173.

影響は評価されてもされ過ぎることはない³⁸⁾。ヴォルテールは明らかに『中国人の手紙』に魅了されたし、フリードリヒ大王は——ちなみにダルジャンは後にこの大王の宮廷で出世する——ヴォルテールやダルジャンから着想を得て自著『フィフィフの報告』*Relation de Phiphihu* (1760) を著した。それは中国の衣をまとった教皇批判の書であった。ダルジャンは政治的には「保守主義者にして君主擁護論者」³⁹⁾であったが、宗教的には完全にヴォルテールやフリードリヒ2世好みの自由主義者であった。「フィロゾフ」philosophe たるダルジャンは、ケンプファーの自然史的観察には関心を示さなかったが、仏教、神道、日本の儒教に関するケンプファーの情報には興味を示し、この情報を比較宗教的な内容を有する長大な論文に利用した。その際、彼は自らの目的のためにケンプファーの著作を細分し利用し尽くして憚るところなかった。彼は次のようなテーマに関してケンプファーから情報を借用している。日本における布教の試みとその失敗の原因(ケンプファーはオランダ人もポルトガル・スペイン人も批判しているゆえ、その両者の偏見に惑わされる必要なくケンプファーを十分に利用することができた)、さらに日本の鎖国政策、日本の神話、神道、仏教、日本の儒教、売春制度、江戸への旅と首都の描写、将軍の謁見。その際、それぞれのテーマによって、日本に対する評価の変動が大きいことは不思議ではない。ダルジャンは、ケンプファーのイエズス会批判を、宣教師を批判する際の自らの拠り所として手を加えることなく利用し、同様に、自らの様々な闘いに役に立つあらゆるケンプファーの報告を利用した。その闘いとは、「とうてい信じ難い」神話に対する闘い、(彼にとって)馬鹿げて見える宗教儀礼(禊祓、食穢)に対する闘い——これは日本のみならずそれに並行するカトリック的ヨーロッパにおけるそれらに対して——、自殺に対する闘い、売春制度に対する(同じくヨーロッパとの並行関係において例えばギリシャやフランス)闘いである。しかし、ダルジャンは、鎖国政策やその根底にある日本人の異国人全てに対する猜疑心を批判している。この点に関しては、日本人に好意的であったケンプファーとは正反対である。

ダルジャンが最も力を入れて描写した挿話は、ケンプファーの二度にわたる将軍謁見の記述であった(Vgl. Bd. 2, S. 285 u. 347)。ダルジャンはこの記述を茶番劇に仕立てたが、その中でオランダ人は、「磁器と小戸棚」の購入許可を日本で受け続けるために奴隷の役を演じている。「これがあのヨーロッパ人なのだろうか。私は自問した。自国にいる時、または自分が支配している国にいる時は誇り

同書によれば『中国人の手紙』は第8版まで版を重ね、1768年にダルジャンの著作集に再録された。

38) 『中国人の手紙』は1768-1771年にドイツ語で刊行された。*Chinesische Briefe, oder philosophischer, historischer und kritischer Briefwechsel, zwischen einem reisenden Chineser in Paris und seinen guten Freunden in China, Moscau, Persien und Japan*. ここでは同版に拠って引用する。

39) Dufrenoy, a. a. O. S. 176.

高い顔をしている、これがあのヨーロッパ人なのだろうか」と⁴⁰⁾。1585年に日本人が教皇の前に跪いたことを数多の文献で鼻高々に記述したヨーロッパ人が⁴¹⁾、今や、立場こそ異なれ、似たような状況で異国の習慣に対してなんの理解もないままであったことは、歴史的な皮肉と言えなくもない。

ダルジャンの中国書簡と同じ文学ジャンルにゴールドスミス Oliver Goldsmith の1762年の『世界の市民、すなわち、ロンドン在住の中国人哲学者から東方の友人に宛てた書簡集』*Citizen of the World, or Letters from a Chinese Philosopher Residing in London to his Friends in the East*がある（1781年にヴェッツェル Johann Carl Wezelによってドイツ語に翻訳された）。ゴールドスミスは第118書簡で、架空の「中国人」の日本宮廷訪問に関するダルジャンの報告を縮小した形で引き継ぎ、ヨーロッパに対する批判的意図も同様に受け継いだ。オランダ人たちの振舞いが「ヨーロッパ一般に対する私の嫌悪を催させた。卑しい貪欲がいかに人間性を墮落させるものか、ここから私は学んだ」。「屏風や喫煙草入れのために国の名誉、さらには、人間らしさという称号までも手放すとは、なんと名誉な交易だろうか」⁴²⁾。将軍の前でのオランダ人の屈辱的な場面としてヨーロッパ人の目に映ったこの場面は、彼らの文化的な優越意識を深く傷つけた。オランダ人によって全ヨーロッパが面目を失ったと考えたのである。このテーマに関して、ダルジャンとゴールドスミスによるほぼ異口同音のオランダ人非難に抗し⁴³⁾、ゲーテがGoetheその生前未刊行の論文「ポーランドにおけるドイツ語の導入に関する提言」*Vorschlag zur Einführung der deutschen Sprache in Polen*（因みに、この論文は外国語授業での教授法に関する大変興味深い示唆を与えてくれる）⁴⁴⁾において「センスと才能を以て演じられれば、ありふれた生活の平凡な日常性であっても、いかに大きな関心を引き起こし得るかを、我々はドイツ演劇の家族場面で体験済みである。オランダ人たちが通常のお辞儀や仕草、日常の仕事を演じて見せた時、日本の皇帝（将軍）は非常に興がったと、ケンプファーにおいて我々は読むではないか」と書く時、それは、日本事情にはほぼ無関心であったゲーテの卓見を物語っている。ゲーテはこうした場面を十分に「パントマイムと解することが」できると言い「言語は単なる付属物として付け足されたに過ぎない」と述べ、異国の言語や作法に対する最初の関心を引き起こすのに極めて好都合と見なして

40) Fünfter Theil, 1771, 125. Brief, S. 49 und 53.

41) Vgl. A. Boscaro, *16th Century European Printed Works on the First Japanese Mission to Europe*, Leiden 1973.

42) Zit. nach der Ausgabe London 1900, Bd. 2, S. 280, 282.

43) もっとも『水陸旅行記全集』（1753）の第11巻は既にメンデス・ピントを根拠として「日本人自身は優れた道化師であり、お偉方は自ら道化を演じて面目を失うとは考えないほどそれを楽しむ」と指摘している（S. 548, Anm. z）。

44) Vgl. Verfasser, „Ordentliche Affenposen.“ *Marginalien zur Einführung der deutschen Sprache in Japan*. In: *Berichte des Japanischen Deutschlehrerverbandes* 15 (1979). ヴァイマル版ゲーテ全集（Sophien-Ausgabe, Bd. 42, 2. Abt., Weimar 1907）は、この論文の成立時期を「90年代の前半」とする。引用はS. 20より。

いる。ダルジャンとゴールドスミスによる非難の後に、ゲーテが（理由がない訳でなく）孤立に生きる日本人の、ヨーロッパ人の立ち居振舞いに対する興味を、日本でのヨーロッパ人の自己表現の可否論争から抜き出し、演劇的修練を経た目で以って、オランダ人たちの演じた見世物を高い「教養価値」を有する社交劇と認識していたことは、慧眼と評することができよう。

上述してきた議論とはずれるが、マティアス・クラウディウスもまた、ケンプファーの『日本誌』のドイツ語版に触発され『ヴァンツベックの使者たち』*Wandsbecker Boten* に「報告」を載せた。この中でクラウディウスは、登場人物であるアスムスとクラウディウスの「いとこ」（この「いとこ」に、ケンプファーを認めることは難しくない）が「皇帝」（将軍）によって許された謁見の有様を報告している。この1778年の「架空の旅」は、一見すると滑稽なだけに見え、日本語の問答とされるものによって、どちらかと言うと名前の付け方においてはスウィフト的な手法を想起させる作品である。だが仔細に検討すると、この作品はレッシング編『匿名の草稿』*Papiere des Ungenannten* の結果起こった「自然宗教」をめぐる激しい論争に対し、地理的に離れてはいるものの本質的には似通っている日本という舞台において、辛らつな寸評を加える試みであったことが判明する。つまり、クラウディウスの将軍も理性原理に基づく儒教に縛られており、「啓蒙された」Hell und Klar レッシングの中にヨーロッパ人の同志を認め、レッシングを是非とも自分の宮廷に呼びたいと言っている⁴⁵⁾。つまり、クラウディウスは、普通は異国趣味的な傾向でケンプファー受容しているが、ここではまじめな宗教批判的な文脈で宮廷場面を描き出したのである。

ケンプファーが報告し、ダルジャンやゴールドスミスが広めた宮廷場面の、以上様々な反映が示すように、「最も幸福な状態の頂点」へと導き「全国中をいわば礼儀の学校」へと変身させた（Vgl. Bd. 2, S. 396, 413）としてケンプファーが高く称揚した鎖国政策にも拘わらず、ヨーロッパ人はこの島国に「理想郷」*Nova Atlantis*⁴⁶⁾を見る気にならなかった。

ヨーロッパの著述家は理想郷的で現実離れた島への憧憬に没頭するためにデフォー Defoe の『ロビンソン・クルーソー』*Robinson Crusoe* を利用したが、その間に、島国日本はヨーロッパ批判の脈絡に取り入れられた。このことは日本がその政治的・社会的状況においてヨーロッパに近いと見られたことを物語る。ピエール・ベールがヨーロッパのキリスト教批判のために望んだような「日本人旅行者の書簡」⁴⁷⁾は存在せず、まさに特徴的なことだがダルジャンやオリヴァー・ゴールドスミスの「中国人による」手紙が存在する。この中で、ヨーロッパ人の状況は、ヨーロッパ旅行中の中国人による文化批判的な風刺によって読者に提示される。その際、ケンプファーが提供した素材は、日本人を中国人の目から、つ

45) Zit. nach: Sämtliche Werke, Hrsg. C. Redlich, 1. Bd., Gotha 1907, S. 151ff. Vgl. dazu Lessings Brief an Claudius vom 19. April 1778.

まり理性と自然に従った中国人の目から描写するために役立っている。これには二重の役割がある。つまり、日本はヨーロッパの苦境を東アジアで体现した存在として様式化される一方、ヨーロッパが全く形無しになる場なのである。

これとは別に大いに議論されたテーマは、啓蒙主義における文学全般において、自殺の問題であった。日本人のこの「習慣」は、ケンプファーによって、感情抜きかつ論評無しに報告されていた (Vgl. Bd. 1. 306)。しかし、ダルジャンは早くもここに決定的な哲学的、国政的問題を見出した。ダルジャンは日本の儒者が容認するのみならず場合によっては勇敢で誉れ高いものとして推奨する自殺に関するケンプファーの報告を、他の場合は有益で美しい儒者の諸道徳に対して「この上なく野蛮な錯誤」に見えると解釈し、「こうした見解以上に人間社会の幸福と国々の安寧に反するものはない」と述べる。もし、一人の哲人には有益であり得るかも知れないこの理論に、「民衆」すなわち人類の4分の3が従ったとしたら「徳の高い人物たち」と同様に「冠を戴く首長たち」ももはや安全ではない、とダルジャンは述べる。こうしてダルジャンは、永劫の罰という脅迫を伴う宗教の裡に国家を護持する要素を見る。というのも、自殺は死後にいかなる罰も受けないという無神論的な確信からのみ実践され得るものであろうとして「自分の命を失うことを何とも思わない悪人は、一体何を恐れる必要があるか。彼は自分の気に食わない人間を殺し、その家屋を焼き払い、財産を篡奪するなどやりたい放題を、罰を受けることなくできるとしてしまうのではないか。捕縛されて処罰される恐れがあると見るや、自らの命を絶ち、こうしていちどきに全てが終わるという訳なのだから。そういう人間は、世俗の裁判をあざ笑い、法律や刑罰をあざ笑うのである」と述べる⁴⁶⁾。

ダルジャンは国家理性を根拠として自殺を激しく攻撃したが、ヴォルテール Voltaire はその 1755 年の戯曲『中国の孤児』*L'Orphelin de la Chine* の中で、運命と自らの倫理的責任の葛藤の中での「不可避の徳」として自殺を定位させた。この戯曲は、ルソー Rousseau の文明悲観主義に対して向けられたもので⁴⁷⁾、早くも 1756 年にドイツ語に翻訳された。この中で、中国人たちはかつて自分たちの生徒であった日本人から、この不可避の徳を学ばなくてはならなかったとしている。ヴォルテールの作中で「私たちがかつてこの人々を啓蒙したのです、この勇敢な島国の人々を。彼らのように死にましよう」と、中国人高級官僚の妻であるイダメは求めているのである (第 5 幕第 5 場)。高尚な自己犠牲に対する彼女の勇敢な決意は、ついに、ジンギス・カーンを征服することとなる。異なる宗教とその実践に対するここでの理解と敬意は、ダルジャンを超えた重要な一步を意味している。ケンプファーの紹介する日本儒教に由来するドイツ文学の脚色で、自殺をモチーフとしたものとしてヴォルテールと比較できるものは、日本人女性

46) A. a. O. Bd. 3, 1769, S. 66-68.

を主人公とするレッシング Lessing の市民悲劇『トンジーネ』 *Tonsine* であって、これは 1966 年になってようやく出版された草稿である。「あなたは異国の中にあって、キリスト教徒たちの支配下にいるのです」と召使の女がトンジーネを怖がらせるが、トンジーネは最悪の場合「自らの教義に従って死ぬ」⁴⁷⁾ という意思を明示するのである。マティアス・クラウディウスによっても——ただし奇怪さを演出するために——利用された自殺のモチーフを⁴⁸⁾、レッシングはダルジャンやヴォルテールのように啓蒙の見解による真摯な挑戦として取り上げている。

文学的題材としての自殺について、18 世紀ヨーロッパの心情が分かれたのは、ゲーテの『若きヴェルテルの悩み』 *Werther* 以降という訳ではない。バロックの殉教劇に登場する主人公たちはまだ、ストイックな冷静さを以ってではあったが、しかし信仰の力によって、殉教の死を耐えていた。けれども、全てのストイックな美德の原型である小カトーが行ったような、勝利を収めた敵に先んじて主人公を自殺させるという筋は、殉教劇の著者の誰も思い至らぬことであった。キリスト教時代の人々の間では、自殺によって死ぬことができるのは卑劣漢だけであって、バロックの英雄はまさに殉教死によって勝利を収めるのである。ゴットシェー ト Gottsched が 1732 年に『死にゆくカトー』 *Sterbender Cato* を出版した時でさえ、然るべき距離を置くのが適当だと考え、「いや、我々は決して自殺を弁護しようとは考えない。まして称揚しようとは思ひもしない」と序文に記している。ヴォルテールは、そしてレッシングもまた、わざわざ中国人ないしは日本人に「美德ゆえの自殺」を計らせたのであって、要するに、両者ともキリスト教的境遇の中で自殺の再評価を敢行したのではない。

ケンプファーの素材をフィクションとして利用した別の例として、ここでは啓蒙主義時代に特有な帝王学の本（フェヌロン Fénelon の『テレマコスの冒険』 *Télémaque* に続くもの）としての小説を挙げることができよう。この小説はケン

47) Zit. nach der Erstveröffentlichung des Entwurfs durch H. Butzmann im Jahrbuch des Freien Deutschen Hochstifts (1966), S. 111. Vgl. Verfasser, *Lessings Tonsine-Entwurf im Kontext europäischer Japonaisierungen des 18. Jahrhunderts*. In: *Doitsu Bungaku* 63 (1979), S. 52-61. レッシングの「トンジーネ」の背景にある実在の女性像に言及した発展研究は以下の題名である。 *Madame Constance und Lessing. Ein Kapitel aus der Japanrezeption der europäischen Aufklärung*. In: *Sprache und Kommunikation im kulturellen Wandel. Festschrift für Eijiro Iwasaki anlässlich seines 75. Geburtstags*, hrsg. von Tōzō Hayakawa u.a., Tōkyō 1977, S. 413-425.

48) クラウディウスの場合、意地の悪い式部長官が将軍に対し「陛下の何人かの偉大なご先祖の立派な慣例にならしまして、陛下の御前でアスムスに自分の腹を切って良いという恩恵を与えては」いかがかと提案する (S. 163)。日本における自殺は大抵「切腹」 *Bauchaufschneiden* によって為されるという、ヨーロッパ人のこの根絶不可能なイメージには、ケンプファーの『日本誌』を典拠とする歴史的な回想がアスムスの内的独白の形でクラウディウスによって添えられる。この回想は「帝王切開」 *Kaiserschnitt* という言葉遊びを超えて、ひたすらアスムスの危機一髪状況の強調にのみ用いられている。つまり「悪意ある帝王切開は、実際にかつて日本で流行していた。6 世紀に統治を行った武烈帝 Kaiser Buretz は自分の慰みのためにしばしば自らの手で妊婦たちの腹を切っていた……」 (S. 164)。この情報をクラウディウスはケンプファーの Bd. 1, S. 200 に見出すことができた。

ブファアを介して日本的な題材を採り上げている。女流作家（匿名のままであった）ボーモン夫人 Madame Leprince de Beaumont は『豊後王シヴァン』 *Civan, Roi de Bungo* (1754) において、架空の旅行やお伽噺並びに冒険小説の諸要素を取り入れてはいるが、こうした要素は単に表層的な脇筋を提供しているに過ぎない（ボーモン夫人の資料の一つは、メンデス・ピント Mendes Pinto 自身が実際に度々訪れた日本を空想的に粉飾した報告）。ボーモン夫人はメンデス・ピント一行の中に実は一人の女性がいたというフィクションを出発点としている。この女性は、豊後王の生まれたばかりの王太子とこの王太子の許婚で皇帝の血筋を引く少女とをヨーロッパに誘拐する決心をする。キリスト教的教育を受けさせるためである。この途方もないがもっともな企ては成功し、計画通り教育されたこの二人は、20年後に実際に日本に帰国をはたす。船上で、はじめてデュリカ——というのがこの美徳の持ち主である女性誘拐者の名だが——は、王太子シヴァンに彼の国について説き聞かせ、日本の着物をまとわせる。この日本についての「地域情報」はピントの旅行記に基づくものではなく、シャルルヴォアを介したものであったにせよケンプファアの『日本誌』が基になっている。豊後の宮廷における宣教の進捗に関する極めて精確な知識は、ボーモン夫人がシャルルヴォアから得ているものである。それでも、ボーモン夫人が「女性の悪い生活」や「街道の悪臭」(S. 232) について記す事柄、とりわけ、この「混乱」に関する歴史的な説明は、直接ケンプファアに由来するものである⁴⁹⁾。

ここまで狭い意味での幾つかの文学的諸例に関して、ケンプファアの日本報告がいかに風刺的・教訓的性格の啓蒙期文学に影響を及ぼしたかを辿ることができた。それはケンプファアその人を名指しで引用すると言う以上に、ケンプファアの報告をそのまま剽窃することでケンプファアの受容を示すため、小説シヴァンのように偽の典拠の中から手がかりをつかむためには、ケンプファアの著作について極めて精確な知識を持たねばならないのである。しかし、このようにケンプファアの情報や主張が、もはや名前すら引用されることもなく、文献的に精確に引用される必要もないほど、既に周知となっていたとすれば、そのことは、ある著作家が及ぼした影響の歴史にとって、一つの極めて精確な物差しと言える。

最後に、ケンプファアが提供した素材が啓蒙主義文学の中で消化された広大な裾野を見渡してみると、ケンプファアの影響が辿れるのは、基本的に三つの大きな分野である。つまり、宗教批判的分野、国政的分野、そして歴史哲学をめぐる議論である。度重なる宗教戦争に悩まされたヨーロッパ人にとって、日本には宗教と信仰の自由が存在しているというケンプファアの情報は火種でない訳がなく、こうしてゴットシェートはケンプファアをまだ知らずに1725年に「残虐で、

49) Vgl. Bd. 2, S. 187. この箇所ではケンプファアは「日本ではどの旅籠屋も公娼宿」であると記し、このことは、かつて軍隊の指揮官たちが妻と離れている兵卒たちの負担を和らげようとしたことに由来するとしている。

消えることがない狂信」の例に日本のキリスト教徒迫害を加えたのだが⁵⁰⁾、一方、ヴォルテールは『風俗試論』*Essai sur les Mœurs*の中でこの「真実を愛し、教養ある旅行者」を自身の見解の証人として引き合いに出した。「宣教に始まり戦争によって終焉したキリスト教」は「もしもイエズス会士が信仰の自由に満足していたならば」、つまり既にある宗教の多元性のうちに留まっていたならば、そんなふうになることは決してなかったのであり、結局のところその事態をもたらしたのはイエズス会士たちなのであったと⁵¹⁾。

また、日本史のある年代についての論争が専門学者の小さなグループの中でのみの関心事であったと考えるべきではない。当時の人々にとって日本は、ドギヌの言ったように「世界中の現今全ての国々の中で、中国に次ぐ極めて古い国」⁵²⁾であったということは、今日の我々が単なる歴史的問題提起と考えるほど自明ではなく、むしろ、聖書の年代か、中国の年代か、そして（ケンプファー以降は）日本の年代か、それらの正当性をめぐる争いが示すように、極めて強力な宗教的爆薬を内包するものであった。ボシュエ Bossuet が 1681 年の『普遍史論』*Discours sur l'histoire Universelle* を、聖書の伝統に則って書き起こしたとすれば、ヴォルテールの『風俗試論』は、中世で終わっているボシュエの普遍史を継続するためと称しつつ、中国やインドなど、より古い非キリスト教的諸文化を以って始めており、つまり、このようにしてヴォルテールは神学が好んだ歴史観を破壊したのである。日本についてもヴォルテールは、この民族の長い歴史に言及した。日本を統治した神々や半神たちの年齢に関するケンプファーの記述は、聖書批判の成立によってやっと、キリスト教的な時間理解・歴史理解を——これは啓蒙主義者にも認めることができる——刺激し、まごつかせる作用を失うのである⁵³⁾。

あらゆる種類の迷信に対する啓蒙主義的な批判、例えば、ダルジャンが『中国人の手紙』で日本の例を引いたり、ケンプファーを援用したりして行ったような批判は、他方で、自己批判的な傾向をも有している。神道神話の世界創造や天皇家の神的な由来や、また、仏教における奇蹟譚に見られる宗教的迷信は、ダルジャンによって厚塗りされる。ダルジャンによれば、偏見や理性を用いることへの不安とか欺瞞的な師匠というものが、普段は分別のある民族を「馬鹿げた信仰」にいつまでも留まらせるのである。そして、ダルジャンにとっては、巡礼や鞭打苦行のようなキリスト教のやり方もまた「日本のものとほとんど同じぐらい馬鹿げ

50) *Von dem verderblichen Religionseifer und der heilsamen Duldung aller Religionen* という題の講演は、ゴットシェートの 1736 年の *Ausführliche Redekunst* に収録され、出版された。ここでは以下のものから引用。J. Chr. Gottsched, *Reden, Vorreden, Schriften*. Leipzig 1974, S. 67.

51) Zit. nach: *Voltaire's sämtliche Schriften*, Berlin 1787, Bd. 8, S. 24, 27; Bd. 10, S. 124.

52) In seiner *Allgemeinen Geschichte der Hunnen und Türken ...*, III. Buch, II. Von dem Kayserthum Japon. S. 182. ドギヌとケンプファーの年代の違いについては Bd. 1, S. 166ff. の該当するドームの注釈を参照。

53) Vgl. K. Löwith, *Weltgeschichte und Heilsgeschehen*. 6. Aufl. Stuttgart 1973, S. 99 ff.

た」宗教的な愚行に属するのである⁵⁴⁾。

国政的な点に関して、モンテスキュー Montesquieu の『法の精神』*Esprit des Lois* は啓蒙主義にとって軽視することができない意味を持っていた。しかしモンテスキューは、アジアの国々の大きさ並びにその気候的条件一般や、ケンプファーが言及したドラコン的な法⁵⁴⁾、またとりわけその厳格な運用を引き合いに出し、日本を専制国家と考えていたのである。ケンプファーが徳川將軍体制の立法を「強情で権力欲の強い領邦君主たち」の抵抗に対する国の「統治」*Policierung* と統一のための努力という歴史的脈絡において見たとすれば (Vgl. Bd. 2, S. 409), モンテスキューは「アジアにおいて国家権力は常に専制的でなければならない」⁵⁵⁾ と断定する。しかしながら、前述したようにド・マルシイはこれに関するケンプファーの主張を詳細に繰り返した上で、日本人の性格付けを行う際、その高度に発達した名誉心を強調した。しかし、モンテスキューはこの名誉心を君主制における基調観念としてのみ承服しようとし、ゆえに日本人の名誉心を否認する。モンテスキューにとって、日本の法律は人間的な理性のあらゆる観念を転倒させるものなのである⁵⁶⁾。この主張の中にヴォルテールは、日本人を「道徳における我々と正反対の人間」として決め付ける傾向の再燃を見ている。ケンプファーの来日時の將軍綱吉が儒教的政治原則に従っていたというケンプファーの報告に立脚して、ヴォルテールは、將軍が「国民の理性的な部分」と一丸となって政治および社会生活における儒教的諸規則に従っていると主張し、それゆえにヴォルテールは、日本において「自然の法が明文化された市民的な法律に転化されている」と言うことができたのである⁵⁷⁾。

日本を専制国家とするモンテスキューに対しては、カスティヨン Jean-Louis Castilhon も反論している。カスティヨンは 1770 年にドイツ語で出版された『諸国民の特質、風俗、政治体制の多様性の自然的、道徳的原因の考察』*Betrachtungen über die physikalischen und moralischen Ursachen der Verschiedenheit des Genie, der Sitten und Regierungsformen der Nationen*⁵⁸⁾ の中で、日本を他のアジア諸国と峻別し、日本には「我らの極めて尊き諸風習、我らの趣味、我らの諸権利そして我らの自由が」と認めている (S. 203)。彼の言によれば、日本民族は「彼らの素質や性格における本質的なものゆえに」自由であって、専制主義が支配することなどあり得ない、なぜなら、そもそも日本は「フランスやドイツと同じよ

54) A. a. O., Bd. 2, 1769, S. 380. ケンプファーは日本の巡礼行を「山伏」Jammabos ないし「山僧侶」Bergpriester と報告し、この巡礼行がマティアス・クラウディウスの関心を引き、彼は巡礼について書き記しただけでなく、みずから実見したと称した。それを疑う者たちに対して彼は「……私の言葉を信じたくない者は、私と同じように日本に滞在したことがあり、日本についてとてもよい本を書いたケンプファーを読み直して調べても構わない」と薦めている (S. 183)。

55) Montesquieu, *Vom Geist der Gesetze*, eingel., ausgew. und übers. von K. Weigang, Stuttgart 1976, S. 281 (17. Buch, 6. Kap.).

56) Buch 12, Kap. 17 (Über die Enthüllung von Konspirationen).

57) *Voltaire's sämtliche Schriften*, Bd. 8, Berlin 1787, S. 20, 24.

うに貴族が世襲的であるから」(S. 204)とした。これはすなわち、ケンプファーが日本の「鎖国論」で表明していた見解全てである。日本人の統治形態に関する議論の際、かなりの役割を果たしたのが、ヨーロッパ人の推測する日本人の国民性であり、それに基づいて、例えば、スウェーデンの日本旅行者トゥンベリ Thunberg も、鎖国を日本人の独立意識と解釈した。類似したことを、ケンプファーは既に 1712 年の「鎖国論」において、ポルトガル人の征服計画に鑑みて表明していた。カント Kant も 1795 年に『永遠平和のために』*Zum ewigen Frieden*の中で日本人のこの措置を支持する。

鎖国の別の観点、つまり国民性の自己戯画化にまで至る様式化を、ヴィーラントは世界市民主義的・歴史哲学的な基本姿勢から提示する。「人類の公共の幸福の目標は」とヴィーラントは 1773 年に「共同して一層完全なものになること」によってのみ達成され得るとした後、次のように述べる。「ある民族が交際嫌いであればあるほど、古代のエジプト人や現今でもまだ中国人や日本人のごとく、自分だけで、そして他の民族から孤立して生きれば一層、より良好にその国民性を維持しはするが、しかし、その分だけ国家の状態は一層不完全なままである」⁵⁸⁾。

ここで日本の鎖国政策に関し、決して征服されたことのない国の強さを認める一方で、ヨーロッパが達成した進歩が日本には欠けているとする歴史哲学的批判について語ることができる。1791 年に『ドイツ百科事典』*Deutsche Encyclopädie* が記すところでは「日本人が啓蒙において進歩し得なかった主原因は、彼らがあらゆる外国人との交際を禁じた点にあることは議論の余地がない」。「模範もなく、競争もないのだから、国民の精神は次第に狭量となり、意気消沈したものになる」⁵⁹⁾。ドーム Dohm は 1779 年に、先述したケンプファー「鎖国論」への後書きの中で日本人が「風俗、道徳、技芸、そして、洗練された立居振る舞いの点で」世界のあらゆる民族に勝っているというケンプファーの主張を鋭く分析し、ケンプファーは 17 世紀末の時点では「アジアの技術や学問と西洋のそれとの関係を正しく展望することができなかった」としてケンプファーに斟酌を加える。「ほとんど全ての技術がこのアジア人たちにより発明され、彼らはほとんど全てにおいて西洋人によって追い越されてしまった」⁶⁰⁾とドームが論断する時、それは、中国や日本に関するヴォルテールの判断に連結するのである。「これらの全ての民族はかつて我々西洋の民族にあらゆる知性の分野において、またあらゆる技術ではるかに優れていた。しかし、我々は何と首尾良く失われた時間を取り戻したことだろう。……他の民族は起源の古さや自然が与えたあらゆる恵みにも拘わらず、技術の分野において、野蛮人あるいは子供であるに過ぎない」⁶¹⁾。

58) Aus einem Aufsatz im *Teutschen Merkur* von 1773 (abgedruckt in: *Sämtliche Werke*, Hrsg. H. Düntzer, 38. Teil, S. 173).

59) Artikel *Japanische Philosophie*, Bd. 16. Frankfurt 1791, Sp. 774.

60) Vgl. Bd. 2, S. 416.

61) Zit. nach der deutschen Ausgabe a. a. O., Bd. 8, S. 18.

ヴォルテールのこの判断は、ヘルダーの『人類史の哲学考』に影響を残した。その中で、ヘルダーは、彼にとってもやはり馴染めないままであった東アジアの諸文化を、マイネッケ Friedrich Meinecke の表現によれば、啓蒙主義の「生硬で表層的なカテゴリー」を以って、例えば野蛮性、専制主義、粗野な華美などといったものを以って研究した⁶²⁾。確かに、ヘルダーは「誇り高い日本」が中国を通じて到達したある程度の「文化の段階」について語りはするが、しかし、遅れをとったアジアの文化というヴォルテールの観察を未来へと延長して「……ヨーロッパが推し進めるような洗練された学問への進歩は、日本と同様に中国においてもほとんど考えられない」⁶³⁾とした。

本来、日本人には信仰や信教の自由があるとするケンプファーの報告を啓蒙主義が歓迎したとしても、また、ヴォルテールの啓蒙の翼が、徳川将軍たちの厳格で封建絶対主義的な統治形態の中にさえ儒教的諸要素があるとして、ヨーロッパに推奨すべきものを発見することができたとしても、やはり鎖国政策についてのケンプファーの見解は（ポルトガル人の征服計画に対する一時的な効用を度外視すれば）、諸国民の世界市民的交流を理想とするコスモポリタンな啓蒙主義には相容れないものではあった。

ケンプファーがヨーロッパの啓蒙主義に紹介した日本像に何が欠けているのかと考えてみると、それは間違いなく日本の芸術、とりわけ文学である。教養ある旅行者ケンプファーは、その存在自体に言及はしたが、ほとんど何も伝えなかった。日本が狭義のヨーロッパ文学への挑発となったのは、ようやく 19 世紀末であり、その頃に 17・18 世紀の日本像はとうの昔に色褪せ、そして、日本理解のための重要な先駆者の一人としてエンゲルベルト・ケンプファーが徐々に再発見されることとなるのである。

伝記的覚書

「ケンプファー（エンゲルブレヒト）は 1651 年の 9 月 16 日にヴェストファーレンのレムゴに生まれた。レムゴの牧師であった彼の父は、リューネブルク、ハンプルク、リューベックそしてトルンの地のギムナジウムで人文学をケンプファーが習得し、さらに 3 年間クラカウ大学にて哲学と現行の諸言語を学んだ後に、しばらくケンプファーに医学を学ばせたが、これをケンプファーはプロイセンのケーニヒスベルク大学で特段の勤勉さを以って習得した。ケンプファーはその後カール 11 世およびウプサラ大学から、彼の運を高めるような有利な申し出がなされたのでスウェーデンへの旅行を行った。しかし、彼はこうした全てを措いて、スウェーデンの外交使節団ファブリッショ Lud. Fabricio 一行と共に秘書の

62) In seinem Werk *Die Entstehung des Historismus*. 1936.

63) A. a. O., Bd. 14, S. 19.

資格で、1683年3月20日にストックホルムから出発する方を選んだ。旅行がモスクワ経由の内陸行であったため、彼は知的好奇心を数多の自然の不思議の詳細な観察によって楽しませる機会を得た。それから2年後に使節団が帰国する際、ケンプファーはオリエントをより知りたいという関心から、そこに残る気持ちになった。そして、ちょうどその頃オランダ東インド会社の艦隊がペルシャ湾を巡航していたため、彼は船上外科医となった。そして、この艦隊はオランダが海外拠点を持っている全ての港に寄港したので、彼は幸多きアラブや大ムガル帝国の諸州、マラバル海岸、ベンガル湾並びにスマトラ島を詳細に観察し、至るところで自然史の凡そ珍しい見聞を得ることができた。ケンプファーは1689年9月、ついにバタヴィアに到着した。しかし、彼はそこに長く留まることなく、翌年の5月にオランダ大使一行の侍医として日本へ渡った。同時にシャム王国も見聞した。ケンプファーは1692年11月にヨーロッパ帰還を決心し、無事に到着した。そして、1694年4月にライデンで博士号を取得した。その後、郷里のレムゴに戻り、収集した情報を整理し、印刷して公刊しようと考えた。しかし、この企図は、ケンプファーが開業医の仕事に追われ、さらに領主のリッペ伯が彼を侍医に取り立てたため、その多忙によって少なからず妨げられた。こうして存命中にはその中の僅かを『廻国奇観』という表題でレムゴにて1712年に出版しただけで、様々な家庭の厄介事や長く患った疝痛が1716年11月2日ついに彼の命を奪った。」

上記の文章は『ツェードラー百科事典』の1737年の第15巻でケンプファーの伝記として見出される。あらゆる人間の生は、その死によってはじめて最終的な目的地を神の裡に得るような、一度きりの船旅のように思われていたバロック時代にあって、ツェードラーの飾り気のない言辞の中には、幾多の教養人の人生が典型的に反映されている。ケンプファーは（彼の生まれる3年前にようやく平和になった）戦後世代に属し、欠乏と同時に生への意思をその世代と共有しながらも、バロックの人生像の別の側面をもまた体現した。この側面は、ケンプファーと同じく医師で（ロシアとペルシャの）旅行家であった彼の同国人フレミング Paul Fleming の有名な詩節によって表現されている。

されど臆する莫れ。されど絶望する莫れ、
不運に屈する莫れ、妬みより高らかに立て……
為されてあるべきを為せ、人が汝に命ずる前に。
汝の今まだ希ひ得るもの、更に今生まれ来るなり。

こうしたキリスト教的かつ克己的なバロックの世界観に、ある新しい世界体験の様相が加わる。その世界体験とは *Curiositas* ないし知的好奇心といった言葉で最も明確に特徴づけられるものであり、ケンプファーは「知的好奇心を楽しませる」*Curiosität vernügen* ことができたと言記作者が記す時、この作者はまさにその世

界体験を示唆しているのである。それは我々の現在の観光旅行とはほとんど関係ないものであり、むしろ、あの「論理的な好奇心の過程」(Hans Blumenberg)に、つまり、デカルト Descartes 以来教養人の気質となり、諸々の教会的・社会的制約を打破する手段として啓蒙主義が完全に承認するような好奇心に属するものである。ケンプファーの中には二つのものが統合されていた。つまり、一方は、自らの幸運を追い求めるバロックの人間の放浪癖であり(しかし同時に、あらゆる面で荒廃したドイツ帝国の狭隘な政治的・社会的状況からの逃避という側面もあった。ケンプファー以前に既に多くのドイツ人オリエント旅行者が見出されるのもゆえなことではないのだ)、他方は、あらゆる市民的な栄達を忘れさせ、旅行者の常ならぬ運命に身を任せるような、既述の「知的好奇心に溢れた」精神性である。ヨーロッパにおいてはマールブランシュ Malebranche あるいはバールといった哲学者たちが厳格な教条主義に対して、この知的好奇心を擁護するが、一方でエンゲルベルト・ケンプファーは自然科学的教養と、宗教的寛容に裏打ちされた観察者に具わった偏見のなさによって、知的好奇心の実践を行ったのである。このことはライプニッツ Leibniz (1646-1716)、ニュートン Newton (1643-1727) やピエール・バール (1647-1706) との生没年の近さ以上にケンプファーと彼らの同時代性を説明している⁶⁴⁾。

訳注

- 一) フランス語版は 1735 年 (Paris) と 1736 年 (La Haye) に出版されており、これらは『日本誌』を含まない。『日本誌』を付録とするのは以下のドイツ語版のみ。*Ausführliche Beschreibung des Chinesischen Reichs und der grossen Tartarey*. 4 Bde. Rostock 1747-1749.
- 二) Frankfurt a. M., 1714.
- 三) これは『百科全書』第 1 巻の出版年。ディドロによる「日本人の哲学」項目は 1765 年の第 8 巻収録。
- 四) スイフトは『ガリバー旅行記』(1726)の中で、オランダ人が日本で踏絵を行っていること、こうした行為によって日本貿易を守っていることを風刺した。(JiE, Bd. 2, S. 178ff.)。
- 五) Joseph Pitton de Tournefort (1656-1708) フランスの植物学者。Leonhard Rauwolf (1535-1596) ドイツの植物学者、医師。
- 六) フランシス・ベーコンが描いた太平洋上の架空の島。この国は自給自足が可能で、幸福と繁栄の状態にあり、これを永続させるために自国民の出国を禁じ、異邦人の入国を認めない(川西進訳『ニュー・アトランティス』岩波文庫、2003 年、32 頁)。「鎖国論」の日本と類似した理想郷である。
- 七) 『歴史批評事典』の「日本」項目(1702)の注釈を指す。この中でバールは、仏教僧の悪徳を非難したイエズス会の日本報告にあてこすって、もしヨーロッパで暮らす日本人や中国人の報告があったとしたら、逆にヨーロッパ人も彼らから大いに批判されるだろう、と述べている。(JiE, Bd. 2, S. 47, Anm. 1.)

64) Detlef Haberland は図版豊富なケンプファーの伝記を公刊した。*Von Lemgo nach Japan. Das ungewöhnliche Leben des Engelbert Kaempfer 1651-1716*, Bielefeld 1990. 大英図書館がこの伝記の英語版を 1996 年に出版した。

- 八) ルソーは、学問が習俗を純化しないとして「無知で粗野な韃靼人」(山路昭訳「学問芸術論」『ルソー全集』第4巻、白水社、1978年、21頁)に征服された中国の例を引く。ヴォルテールの劇において、野蛮な征服者ジンギス・カーンは最終的に美しい人間性によって純化される。ヴォルテールは、この「徳と文化の勝利」をルソーの『人間不平等起源論』に対置させたと、カピッツァは指摘している(JiE, Bd. 2, S. 502)。
- 九) 犯罪者は罪の軽重を問わず死罪となる法律。比喩ではなく、ケンプファーは日本の法律をそのようなものとして説明している。
- 十) フランス語からの翻訳で原著名は以下。*Considérations sur les causes physiques et morales de la diversité du génie, des moeurs, et du gouvernement des nations, tiré en partie d'un ouvrage anonyme, par M. L. Castilhon, Bouillon 1769.*

訳者あとがき

本稿はペーター・カピッツァ博士の論文 *Engelbert Kaempfer und die europäische Aufklärung* の邦訳である。18世紀ヨーロッパのケンプファー受容と日本観とを主題とした同論文は当該分野の最重要論文の一つだが、ドイツ語での2度の出版にも拘わらず、邦訳がなかったため初訳を試みた次第である。

カピッツァ博士は邦訳をご快諾下さり、また、同夫妻は拙訳を通覧し、疑問に丁寧にお答え下さった。ご厚意に篤く御礼申し上げたい。2008年の国際高等研究所における研究会「多元的世界観の共存とその条件」(研究代表者：石川文康)の資料として配布し、ご参会の諸先生方より貴重な指摘を賜った。とりわけ井川義次先生、小関武史先生に数多の教示をいただいた。平素よりご指導いただいている藤田恭子先生にも多くの示唆を頂戴した。心より感謝申し上げる。

当翻訳は序文や注を含め全て復刻版(Iudicium Verlag, München 2001)に拠った。ただし、図版は省略した。原注は文末にアラビア数字で記し、可能な限り原文のままに表記し、必要な場合は日本語に置き換えた。補足を要すると思われる箇所には訳注を漢数字で付した。使用した略号 JiE は Kapitza, P. (Hrsg.): *Japan in Europa* (2 Bde. u. Begleitband, Iudicium Verlag, München 1990) を指す。本文中の() は原著者によるもので、【 】は訳者による。原文の Kaempfers Japan Werk は「ケンプファーの『日本誌』」と訳した。日本で「鎖国論」として知られる論文は、Kaempfers Essey über die japanische Abschließungspolitik ないしそれに類する表現で呼ばれるが、通例にならって「鎖国論」と表記した。

岡野 薫